博士論文（要約）

論文題目　　『源氏物語』の世界とその文学史的位置についての研究
氏　　名　　室田　知香

目次

序……5

第一篇　若菜以後の光源氏と物語の原理

第一章　若菜上巻冒頭における「後見」の論理と光源氏
——史上の皇女の入内・結婚と『源氏物語』とのあいだ——……14

第二章　光源氏の後宮理念……44

第三章　女三宮の裳着と「後見」光源氏——〈六条院降嫁〉の基層——……62

第四章　柏木物語の引用的表現とその歪み——「帝の御妻をも過つたぐひ」の像と柏木——……79

第二篇　『源氏物語』の『竹取物語』受容

第一章　『源氏物語』第二部後半の『竹取物語』受容……99

第二章　死者と昇天——『竹取物語』再会への系譜——……118

第三篇　平安文学の時間意識と中国文学

第一章　「ふる」と「なる」——恋の時間・結婚の時間——……137

第二章　中国六朝詩の時間意識と平安文学……155

第三章　『万葉集』一八八四・一八八五番歌と新しきもの・古きもの
——和漢比較の観点から——……177

第四篇　拾遺集・後拾遺集時代の「この世」と来世

第一章　柏木の死が拓くもの——「この世の思ひ出」と死者からの「あはれ」——……196

第二章　拾遺集・後拾遺集時代以降の「ふる」と「なる」……213

補章　『源氏物語』鈴虫巻……233

第五篇　『源氏物語』の世界とその文学史的位置

第一章　『源氏物語』第二部における源氏・紫上夫妻の理想性——時間の彼方——……248

第二章　最後の光源氏——御法・幻巻の対偶性より——……262

結語……282

初出一覧……288

本文

（五年以内に出版予定。）

参考文献一覧

秋山虔「「若菜」巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章―」（『日本文学』九巻六号　一九六〇年七月）

秋山虔「「若菜」巻の問題ひとつ―源氏物語の方法に関する断章―」（関西大学『国文学』二九号　一九六〇年一〇月）

秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―光源氏四十賀の記事をめぐって―」（西尾実・小田切秀雄編『日本文学古典新論』河出書房新社　一九六二年一二月）

秋山虔『源氏物語の世界』（東京大学出版会　一九六四年一二月）

秋山虔「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」（『国文学』一五巻六号　一九七〇年五月）

秋山虔『王朝女流文学の世界』（東京大学出版会　一九七二年六月）

秋山虔「源氏物語の世界―光源氏についての断想―」（『新・源氏物語必携』学燈社　一九九七年五月）

秋山虔・渡辺実（対談）「源氏物語作者の表現意識」（『国文学』二七巻一四号　一九八二年一〇月）

浅尾広良『源氏物語の準拠と系譜』（翰林書房　二〇〇四年一月）

浅尾広良「光源氏の元服―「十二歳」元服を基点とした物語の視界―」（『源氏物語の始発』竹林舎　二〇〇六年一一月）

阿部秋生「源氏物語のモデルと作者の投影」（『解釈と鑑賞』一五巻七号　一九五〇年七月）

阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会　一九五九年四月）

阿部秋生『光源氏論　発心と出家』（東京大学出版会　一九八九年八月）

池田亀鑑『新講源氏物語　上巻』（至文堂　一九五一年二月）

石田穣二『源氏物語論集』（桜楓社　一九七一年一一月）

石津（細野）はるみ「若菜への出発―源氏物語の転換点―」（『国語と国文学』五一巻一一号　一九七四年一一月）

伊藤博『源氏物語の原点』（明治書院　一九八〇年一一月）

井上光貞「源氏物語の仏教」（『井上光貞著作集第十一巻』岩波書店　一九八六年四月）

今井源衛『紫林照径』（角川書店　一九七九年一一月）

今井源衛『源氏物語の研究』（未来社　一九六二年七月）

今井源衛『王朝文学の研究』（角川書店　一九七〇年一〇月）
今井上『源氏物語　表現の理路』（笠間書院　二〇〇八年六月）
今井久代『源氏物語構造論』（風間書房　二〇〇一年六月）
今西祐一郎「「色好み」私論」（『静岡女子大学国文研究』八号　一九七五年二月）
今西祐一郎「「すき」私論」（『静岡女子大学国文研究』一〇号　一九七七年二月）
今西祐一郎『源氏物語覚書』（岩波書店　一九九八年七月）
エヴァンズ，ハワード『虫の惑星〔1〕』（早川書房　一九九四年八月）
大朝雄二『源氏物語正篇の研究』（桜楓社　一九七五年一〇月）
岡一男『源氏物語の基礎的研究』（東京堂　一九五四年一月）第一部「紫式部の周辺と生涯」
岡一男「竹取物語論」（同『古典の再評価』有精堂出版　一九六八年六月）
奥津春雄「竹取物語の成立年代について」（『国文学研究』一一　一九五四年一二月）
奥津春雄「月の都―紫式部の『竹取物語』摂取の方法―」（『国文学研究』四三　一九七一年一月）
奥津春雄『竹取物語の研究』（翰林書房　二〇〇〇年二月）
小沢正夫『古今集の世界』（塙書房　一九六一年六月）
加藤洋介「「後見」攷―源氏物語論のために―」（『名古屋大学国語国文学』六三号　一九八八年一二月）
風巻景次郎『日本文学史の研究』（角川書店　一九六一年四月）
川合康三「悲観と楽観―抒情の二層―」（『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院　二〇〇〇年三月）
川合康三『中国の恋のうた　『詩経』から李商隠まで』（岩波書店　二〇一一年五月）
河添房江『源氏物語表現史』（翰林書房　一九九八年三月）
河村政久「昌子内親王の入内と立后をめぐって」（『史叢』一七号　一九七三年九月）
菊地靖彦「掛詞・縁語」（『論集和歌とレトリック』笠間書院　一九八六年九月）
岸俊男『日本古代政治史研究』（塙書房　一九六六年五月）
木谷眞理子「鈴虫巻の女三宮」（『人物で読む源氏物語　第十五巻　女三宮』勉誠出版　二〇〇六年五月）
久下裕利「物語の廻廊―養女譚―」（『学苑』七〇六号　一九九九年二月）
窪田空穂「古今和歌集概説」・「後記」（同『古今和歌集評釈　上・下』東京堂　一九三五～一九三七年）

後藤祥子「玉鬘物語展開の方法」（『日本文学』一四巻六号　一九六五年六月）
後藤祥子「小野小町試論」（『日本女子大学紀要』二七号　一九七八年三月）
後藤祥子『源氏物語の史的空間』（東京大学出版会　一九八六年二月）
小島憲之『国風暗黒時代の文学　下Ⅰ』（塙書房　一九九一年六月）
小島憲之『国風暗黒時代の文学　下Ⅱ』（塙書房　一九九五年九月）
小西甚一「古今集的表現の成立」『日本学士院紀要』七巻三号（日本学士院　一九四九年一一月）
小町谷照彦「業平（伊勢物語）―みやびとなさけ」（『国文学』三八巻一一号　一九九三年一〇月）
近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房　二〇〇五年二月）
斎藤暁子『源氏物語の研究』（冬至書房　一九七九年一二月）
斉藤国治『古代の時刻制度』（雄山閣　一九九五年四月）
三枝秀彰「「かひなきあはれ」―竹取による柏木の造型―」（鈴木日出男編『源氏物語の時空　王朝文学新考』笠間書院　一九九七年一〇月）
三枝秀彰「「絶えぬ思ひの煙」―竹取・源氏の喪失と惑いの主題―」（『国語と国文学』七五巻九号　一九九八年九月）
清水好子『源氏の女君（増補版）』（塙書房　一九六七年六月）
清水好子『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会　一九八〇年六月）
白石良夫『古語の謎』（中央公論新社　二〇一〇年一一月）
陣野英則『源氏物語の話声と表現世界』（勉誠出版　二〇〇四年一一月）
鈴木修次『中国文学と日本文学』（東京書籍　一九八七年七月）
鈴木日出男「『竹取物語』の異郷と現実―語りの眼」（『国語通信』二四八号　一九八二年九月）
鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会　一九九〇年一〇月）
鈴木日出男『源氏物語虚構論』（東京大学出版会　二〇〇三年二月）
鈴木宏子『古今和歌集表現論』（笠間書院　二〇〇〇年一二月）
関根賢司『物語文学論』（桜楓社　一九八〇年九月）
高木和子『源氏物語の思考』（風間書房　二〇〇二年三月）
高木和子「光源氏の物語としての源氏物語」（『国語と国文学』八二巻五号　二〇〇五年五月）

高田信敬『源氏物語考証稿』（武蔵野書院　二〇一〇年五月）
高田祐彦『源氏物語の文学史』（東京大学出版会　二〇〇三年九月）
高橋亨『源氏物語の対位法』（東京大学出版会　一九八二年五月）
竹島寛『王朝時代皇室史の研究』（右文書院　一九三六年三月）
田坂憲二『源氏物語の人物と構想』（和泉書院　一九九三年一〇月）
田中仁「浮舟の歌―浮舟・雪・雲―」（『国語国文』六二巻四号　一九九三年四月）
玉上琢彌『源氏物語研究』（源氏物語評釈別巻一）（角川書店　一九六六年三月）
塚原明弘『源氏物語ことばの連環』（おうふう　二〇〇四年五月）
土居奈生子「〈准太上天皇〉の結婚―「女三宮の降嫁」再検討―」（『名古屋大学国語国文学』八三号　一九九八年一二月）
永井和子『源氏物語と老い』（笠間書院　一九九五年五月）
中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』（笠間書院　二〇〇五年一月）
中村元「無常の自覚」（『国文学』一六巻六号　一九七一年五月）
南波浩『物語文学概説』（ミネルヴァ書房　一九五四年三月）
南波浩『古典とその時代Ⅲ　物語文学』（三一書房　一九五八年九月）
野口元大「解説―伝承から文学への飛躍―」（新潮日本古典集成『竹取物語』解説　一九七九年五月）
野村精一『源氏物語の創造』（桜楓社　一九六九年九月）
橋本万平『日本の時刻制度　増補版』（塙書房　一九七八年五月）
伴瀬明美「摂関期親王家の国家的給付に関する基礎的考察―摂関期における皇子女扶養形態の再検討にむけて―」（『古代中世の社会と国家』清文堂出版　一九九八年一二月）
日向一雅『源氏物語の主題』（桜楓社　一九八三年五月）
服藤早苗『平安王朝の子どもたち　王権と家・童』（吉川弘文館　二〇〇四年六月）
福山泰男『建安文学の研究』（汲古書院　二〇一二年三月）
藤井貞和『源氏物語の始原と現在』（砂子屋書房　一九九〇年九月）
藤原克己「小野小町の歌のことば」（『和歌文学論集二』風間書房　一九九四年一〇月）
前田善子『小野小町』（三省堂　一九四三年六月）
益田勝実「『源氏物語』の転換点」（『日本文学』一〇巻二号　一九六一年二月）
益田勝実「光源氏の退場―「幻」前後―」（『文学』五〇巻一一号　一九八二年一一月）
益田勝実『火山列島の思想』（筑摩書房　一九九三年一月）

増田繁夫「竹取物語から源氏物語へ」（『国文学』三八巻四号　一九九三年四月）
増田繁夫「若菜巻の紫上」（『国語と国文学』七五巻一一号　一九九八年一一月）
松井健児『源氏物語の生活世界』（翰林書房　二〇〇〇年五月）
松岡智之「死―紫の上の死を中心に―」（『源氏物語研究集成第十一巻』風間書房　二〇〇二年三月）
三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』（和泉書院　一九九九年一〇月）
室伏信助『王朝物語史の研究』（角川書店　一九九五年六月）
森一郎『源氏物語の方法』（桜楓社　一九六九年六月）
森一郎「擬似王権・まぼろしの後宮・六条院　その生成と変容―「朝廷の御後見」から「准太上天皇」へ―」（『王朝文学研究誌』二号　一九九三年三月）
森田浩一「夫婦のうた―六朝における」（『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院　二〇〇〇年三月）
諸田龍美『白居易恋情文学論』（勉誠出版　二〇一一年二月）
柳井滋「御法・幻巻の主題」（『源氏物語研究集成第二巻』風間書房　一九九九年九月）
柳井滋「源氏物語における「出家」」（『国語と国文学』七五巻一一号　一九九八年一一月）
山口博『王朝歌壇の研究―村上冷泉円融朝篇―』（桜楓社　一九六七年一〇月）
山口博「小町閨怨」（『中古文学』二二号　一九七八年九月）
山口博『閨怨の詩人小野小町』（三省堂　一九七九年一〇月）
山本一也「日本古代の皇后とキサキの序列―皇位継承に関連して」（『日本史研究』四七〇号　二〇〇一年一〇月）
安田政彦『平安時代皇親の研究』（吉川弘文館　一九九八年七月）
安田政彦「醍醐内親王の降嫁と醍醐源氏賜姓」（『続日本紀研究』三七四号　二〇〇八年六月）
与謝野晶子「紫式部新考」（『太陽』一九二八年二月号）（ただし同論は『日本文学研究資料叢書　源氏物語一』（有精堂　一九六九年一〇月）によって確認した）
吉岡曠『源氏物語論』（笠間書院　一九七二年一二月）
吉川幸次郎「推移の悲哀」（同『吉川幸次郎全集第六巻』筑摩書房　一九六八年四月）
吉川幸次郎「推移の感覚」（同『吉川幸次郎全集第二十一巻』筑摩書房　一九七五年五月）
吉田幹生「〈あき〉の誕生―万葉相聞歌から平安恋歌へ―」（『成蹊国文』四三号　二〇一〇年三月）

吉田幹生「若菜巻の紫の上――「世」への傾斜と「憂し」の不在」（『成蹊国文』三九号　二〇〇六年三月）
李宇玲『古代宮廷文学論』（勉誠出版　二〇一一年六月）

要旨

本論文は、『源氏物語』の特に所謂第二部の達成点について考え、また、『源氏物語』を文学史上に定位するための有効な視座を模索する、という目的を有している。構成は全五篇、十四章から成る。

第一篇「若菜以後の光源氏と物語の原理」は、『源氏物語』第二部における物語展開の原理を考察した諸章である。光源氏の主人公としてのあり方、物語の引用的表現が持つ可能性、『源氏物語』の写実性と虚構性、また、理念的な思考と実際的な憂慮の葛藤、といった視点から、第二部の諸相を考えた。本博士論文全体の問題提起に当たる部分である。

若菜上巻から始まる第二部の物語については、長らくその写実性が漠然と信じられてきたように思われる。しかし、物語を読み込み、また史上の類例と比較していくと、その写実性あるいは必然性の質に関し、判断に迷うような諸要素も見えてくる。第一篇第一章では、特に朱雀院の女三宮の処遇をめぐる思考について、平安史上の類例を広く調査し比較し、同時にまた物語の叙述の方法も精査しながら、物語の質を複眼的に考察するよう努めた。

ここで一つ注意したいのが、『源氏物語』以前には、少なくとも現在残る文献の上では、「後見」獲得のための皇女降嫁ということが明記されたものが見出されない、という点である。『源氏物語』若菜上巻では、「後見」なき皇女の処遇を思考する論理は、光源氏という、人々の憧れであったところの虚構の人物の像に即して、しだいに言語化され、構造化されていく。『源氏物語』は、この虚構の像を土台として、作中の現実味を支える論理――そしてそれが史上の現実にも光を当て得る論理となっている――を構築しているのである。第一篇第一章では、このような考察を通し、かつて益田勝実氏が『源氏物語』研究をリアリズムの観点に収束させてしまう危惧を表明していたことの意義、また、秋山虔氏が若菜巻の文学史的な新しさについて「必然的」展開の志向等と言及していたことの意義を再考し、考究すべき問題の再設定を試みた。

また、『源氏物語』の虚構性や写実性を検証しようとするとき、問題を読み解きがたくしている要素として、史上の諸例にも、理念的なものに導かれての発想と、実在する具体的な諸事情に基づいての発想という、二側面が混在している、という問題がある。すなわち、入内ということに関していえば、前者は、後宮を、複数の妻妾が共存すべき場、かつ、天皇という至高の人物のそば近くにあってその庇護と恩寵に浴することができる場、ととら

える発想である。後者は、至高の人物である天皇の庇護を受けられるとはいえ、実際に入内した際の「後見」の強弱から生ずる諸問題を憂慮する発想である。『源氏物語』においてはこれら二側面の思考の葛藤が明瞭に描かれているくだりがまま見出されるのであり、皇女の場合はその葛藤はなおさら強いに違いない。

第一篇第二章は、そうした葛藤を若菜上巻の物語がどのように処理しているかを分析し、物語展開の仕組みを考えた章である。『源氏物語』という作品は、若菜上巻冒頭において、非常に怜悧なことばでもって前述のようなジレンマを割り切る一つの論理を構築している。理念的なもの、理想的なものを抱え込みながら、作中の新たな現実の展開のため、作中世界を支えるべき論理を物語内のことばとして構築しつづけていく、この作品の特色的な一様相を見出すことができる。

第一篇第三章は、朱雀院が光源氏に期待していた女三宮への「後見」の内実を問いなおし、若菜巻の皇女降嫁論の性質を確認した章である。准太上天皇光源氏の身分的位置づけや第二部の物語の基盤を確認した章でもある。

第一篇第四章は、『源氏物語』第二部における引用的表現の可能性について考えた章である。特に柏木をめぐる物語においてふんだんに用いられている引用的表現群が、どのように物語を導き得る力を持ち、また、その力がどのように挫折（あるいは歪曲）しているのか、そこに光源氏という人物が物語展開の原理としてどのように関わっているかを考察した。

これら第一篇の考察を通し、本博士論文では、『源氏物語』第二部が達成したことの意義を、必然性や写実性というよりもむしろ、独自さを志向する傾向が非常に色濃くあり、これまでの作中世界の諸相を土台としつつ、『源氏物語』という作品をいっそう独自なところへと導いていこうとする積極的な意欲に満ちたものであったことに見出している。このような着眼を示した上で、以下の諸篇では、『源氏物語』の文学史上の位置づけをさらに『竹取物語』受容・時間意識・死生観・来世観といった諸面から考えた。

第二篇「『源氏物語』の『竹取物語』受容」は、第一篇第四章に次いで、『源氏物語』と既往の文学作品の関係について考察した諸章である。他作品における『竹取物語』受容と比較しつつ、『源氏物語』の第二部後半、特に御法巻における『竹取物語』受容の独自性について考えた。

御法巻では、紫上の火葬の場面において、この野辺送りの帰途が「十五日の暁」に当たっていた、という叙述がある。現代の諸注釈では一般にこれを「十四夜」の明け方として

いる。が、「暁」という語の用法、及び、『源氏物語』における日付の境を検討すると、この表現は「十五夜」の明け方頃を指す表現と読むのが最も蓋然性が高そうである。『源氏物語』の中でも最も明瞭に『竹取物語』引用が指摘できる箇所といえよう。そしてまた、御法巻の『竹取物語』引用の焦点化するところが、火葬による紫上のはかない消滅の姿――この世の人のはかない死と消滅の姿であったこともまた、『源氏物語』の『竹取物語』受容の特質として重要である。すなわち、『竹取物語』の描く理想郷としての天界は、人間が人間であるままには享受し得ないほどの冷酷非情な「物思ひなき」理想郷であった。そうした、人間界からは徹底的に乖離する異世界を、『源氏物語』は人の死の上に見定めたのである。

平安時代の文学作品では、火葬の「煙」を介して、人間が死後天界へと昇天するかのように表わす表現が見出されるようになる。これは、魂の帰天というような発想と似るようでいて、著しく異なる要素を含む文学的表現であろう。平安の私家集や物語の表現を調査すると、死者の昇天を空想する文学的表現が、天界への飛翔という甘美な夢と、人間のはかない末路の凝視という、裏腹な要素を含みこみつつ展開していることが知られる。その中で、たとえば『小町集』長歌や西本願寺本『平兼盛集』巻末佚名歌集の表現は、いわば、人間のはかない末路をみつめつつも、それを凝視しつづけることに堪えきれなかった作品、という一面がある。一方、『源氏物語』は、人間のはかない死と消滅の姿をあくまでも鋭く凝視しつづけたところから、人の死そのものの中に真の異世界の存在を見出した作品であった。

第三篇「平安文学の時間意識と中国文学」は、中国文学における時間意識・時間表現のあり方と比較しながら、日本の古代文学における男女関係上の時間意識の系譜を考察した諸章である。平安時代中期、特に特徴的に、二種の時間意識の対立と葛藤が見出されるという問題を論じた。この第三篇の諸章において得られた考察は、時間という要素が重要な原理となるといわれる『源氏物語』第二部のあり方を考える際にも有効な足がかりとなるだろう。

第四篇「拾遺集・後拾遺集時代の「この世」と来世」は、『源氏物語』が成立した頃の時代における「この世」及び来世をめぐる思想について、文学作品上の諸表現に見出される問題を考察した諸章である。この時代の文学作品には、生者が、死にゆく者あるいは死者からの眼差しを先取りして、「この世」を遠くはるかに眺めつつ、やがて一回的に別れてしまわなければならない「この世」への多大な愛情を表わす、というような表現が散見する

ようになる。浄土思想や無常観の浸透とは裏腹に、むしろはかない「この世」であるからこそいっそう「この世」を重く愛しいものと感ずる、というような見方が、この時代台頭してくるのである。

この時期の文学表現には、無常観の浸透とはむしろ裏腹なかたちで「この世」という場のみつめ方が変化してゆく徴候がしばしば見出される。そうした様相をとらえ、『源氏物語』の世界観や死生観について、仏教思想一辺倒で考えるのでない考察基盤を構築することを試みた。

第五篇「『源氏物語』の世界とその文学史的位置」は、本博士論文の実質上のまとめに当たっている。第一章では、紫上の時間推移についての思念に着目し、紫上という人物の転換点を探った。また、源氏・紫上夫妻の理想性の意義を考察した。

第五篇第二章では、本博士論文全体の考察を吸収しながら、最晩年の光源氏のあり方を考察した。『源氏物語』の三部構成説が普及して以来、第二部の光源氏については、しばしば「人間光源氏」といったことがいわれる。が、この「人間」とは、どのような意味合いで用いるべき語であろうか。『竹取物語』の人間観とも対比しつつ、『源氏物語』の人間観、死生観、最後の光源氏の姿の意味合いを考察する。そして、『源氏物語』の光源氏が、『竹取物語』の〈人間〉を超える者として描き出されていることを、御法・幻巻の表現の分析を通して論ずる。また、第二篇や第四篇の考察に続けて、『源氏物語』の特に光源氏・紫上における死の意義づけの特異性にも触れている。

『源氏物語』が特に第二部以降どのように文学史的に独自な発展を遂げているか、また、光源氏が主人公として、あるいは物語における原理的な存在として、いかなる豊かさをもって生きつづけているかを問いなおした博士論文である。